特定非営利活動法人
サヘルの森　機関誌
サヘル
SAHEL
No.103　2018. 12

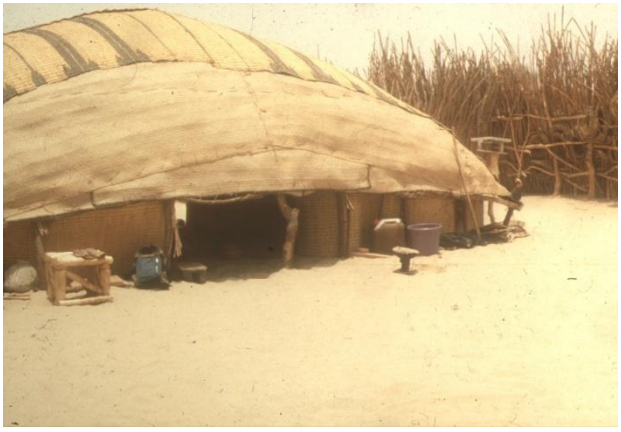
砂漠の気象　その激しさと秘めたるエネルギー

小島通雅

1988 年 2 月 14 日、砂漠の中に到着する。干上がったファビキンヌ湖の北岸にあるティンナイシャ村は、北岸に面するとは言え、干上がってから 10 年以上は経っている。その間に北の砂漠から容赦なく砂はふき寄せて、いまは村から旧湖底迄は高さ 5～8m位の砂丘が 2 キロ程続く。

着いた村にホテルはない。村人の家も我々を泊めるような余裕はない。差し当たって今晩どう寝るか？とにかく、その晩は学校の前にある倉庫の軒下に荷物を置き、そこに寝袋を出して潜り込む。村人の住んでいる家はブグウといい、ゴザの小屋。2 本の丸太を 3～4m離して砂に立て、それに低木の細い幹を束ねた半円状の棟木を渡し、更にそれと直角に半円状の木の根の垂木をかけて紐でしっかりと縛る。その上にゴザをかけて紐で止める。安くできるし、早くもできる。

我々はブグウの家を作って宿舎にすると宣言、呆れられた。でもこれが幸いした。ブグウは女性が作る家だとか。小生がしたのは、「この村でブグウを作るのは誰が一番上手か？」と聞いただけ。村一番の女性棟梁が材料の調達から人の手配、建設、仕上がり後の清掃まで全てOK。2 月 27 日には引越し完了、到着後 2 週間の早業！



次は家の周囲を囲うこと家の前に苗畑を作ることだ。この材料として使うのが旧湖底（ターライト）に作つけられているトウジンビエ（エーネリ）の主稈（コゴリ）、これを同じくターライトに自生するカロトロピス（トルシャ）の棒（タボリ）を柱に結びつけて作る。現地資材の活用、調達の仕方、人の雇い方等を学習する。これは次の本格的な植林プロジェクトを進めるにあたって大いに参考になった。

しかしこうして造ったブグウや苗畑も使われた期間は短い。

それは、当時のプロジェクトを進めるスローガンを「小規模基地順次展開多段階モデル」と称して、住み込んで活動はするが住居を次々と移すことで、一箇所への関与を大きくしないようにすること、また、出来上がった一つのモデルではなく、作業を進めていく上でのモデル、多段階のものを、村人の市（エーウィズ）などで動く行動範囲内に用意してみせる。これによって具体的にやり方がわかると共に集落毎の競争心を引き出そうとしていた。こうゆう事だから一つの拠点に長く住まない事となった。

出来上がったブグウに住み、すぐ前の苗畑で育苗を始める。季節は 3 月、少し暑くなり始めたとはいえ、朝晩は快適、特に朝 5 時頃からの朝日、朝焼けが素晴らしい。夕焼けから続く満天の星空も素晴らしい。しかし季節は進み、5 月が近づくにつれ、ターライト迄の砂丘越えはかなりキツくなる。砂山の上り下りの続く 2 キロの砂丘、特に正午過ぎの戻りがきつい。すぐにターライトに浅い井戸を掘り、小さな苗畑や自分たちの日よけ休憩所を作る。

ボチボチ雨期が近づいてくる。雨期といっても日本のように梅雨が降り続くわけではない。

砂嵐と雨がやって来る季節だ。時々東の空に茶色の砂嵐が小さく現れる。これがドンドン大きくなり、なま暖かい風が次第に強くなり、その辺りのゴミや砂が巻き上がりだし、周囲が薄暗くなる。最後に大粒の雨が来るというパターン。時として方向がずれたりして雨が降らずカラ振りの砂嵐だけのこともある。

砂嵐が近づいて来ると屋外に出ているのは日本人だけ。村人は全てブグウに入り、立てゴザをピタリと閉めている。最初のうちはおとなしく、自分たちのブグウの前でじっと観察、雨が来たらすぐブグウに逃げ込めるように。しかし、ターライトはどうなっているのだろう？ターライトに行ってみよう。ー村に車がある時、砂丘に向かう。砂丘が終わるとそこは湖岸沿いに車や家畜の群れが通る幅の広い通行帯があり、その先に畑の柵がある。この幅の広い通行帯は土が堅く締まっているので今、降ったばかりの雨が水溜りとなって残っている。嵐の雨は東風でやってくるが、最後の吹き返しで西風があり、それで通行帯の水はかなり畑の方へ吹き寄せられたに違いない。そこで気が付く。もし柵側（通行帯の東側）に穴を列状に掘っておけば、タップリ水が入るぞ！砂嵐の降雨がある前に深い穴を列状に掘っておく、雨を伴わない風で砂やロバ糞その他でまず軽く埋め尽くされ、そして雨を伴う砂嵐でバッチリ完成だ。それは1990年に実証できた。

こうした砂嵐時のような目に見える激しい動きのものでなくても、照りつける太陽光線のもと熱い砂の上で静かに進行する物質分解のある事に気づく、又その分解物を上手く利用する次のプロセスが動いている。村のブグウにトイレはない。我々のブグウも例外ではない。トイレに行きたくなればターライトとは反対の砂漠の奥の方（人通りが少ない）に向かって3～400メートル歩いていき、砂丘の影に入って用を足す。あとは持っていった水でお尻を洗い清めて終わる。砂の上に落ちた〇〇は、フンコロガシという虫が丸い団子を作って転がして巣に持っていくが、残りは乾いた砂や乾いた風に水分をとられ、砂に打たれて細かくなる。風で転がって更に乾いた砂の上へ。こうして村の辺りへ戻って来る頃には熱や光線で消毒され脱臭されて、やって来る。砂の中にもどう混じっているかわからない。

南岸ムブナでの活動を本格化したりするにつれ、北岸ティンナイシャ周辺とは違った砂丘を見るチャンスが増え、次のような新しい知見が出てきて、「移動砂丘における防砂垣なしでの植林ー長根苗による植林法」の実用化につながった。以前から移動砂丘の稜線から砂が風で飛ぶ姿は写真でも現場でも見る事はあったが、ある雨の日ムブナの移動砂丘の下にいて移動砂丘を見上げていると、斜面の2～3平方メートル分がズルズルと下にずり落ちてくる。このずり落ちは風下斜面全体で数秒から数十秒おきに起きる。考えてみると風下側斜面の急傾斜に保たれていた乾砂に雨粒があたって、砂の層の重量が増して下にずり落ちて、乾いた面が出てまた濡れて落ちる。これを雨が強く降っている間繰り返す。雨が止んで、陽がさし乾いた風が吹けば、風下側砂丘の裾の湿って貯まった砂の上に風で飛んできた乾いた砂が蓋をする。もしかして移動砂丘の下に水分があるのかもしれない。そう思ってムブナの砂丘で2メートル位の鉄パイプで色々な所に穴を掘って廻る。すると、かなり多くの所で地下30センチ位から湿った砂に当たることが多い。かくして長根苗の発想につながった。

こうした頃からの、気になれば色々な所を気軽に見て廻るスタイルの自然観察は今でも続いている。そこに見る自然の完璧とも言えるメカニズムに素直に感服することが多い。それが我々が出来る関与、すなわち作業上のアイディア等に繋がることも多い。今進行中のファナのラテライト裸地での植栽試験でも、アリ塚への植栽だの、植栽後の草本盛土方式として実を結んでいる。

里山再生の実践のその先

榎本　肇

里山再生のための実践者研修を始めて 4 年が経ちました。これまでに 9 ヵ村 27 名の研修者が生まれ、一部は家庭の事情などで休止状態ですが、7 割ほどはそれぞれが地道に里山再生の活動を行っています。

研修はひとまずお休みにして、これまでの研修者たちの活動をサポートして、里山再生の活動を充実させるとともに、周りの人々を巻き込んでいきたいと考えています。

ファナ薪炭最新事情

ファナ地域では、これまでも比較的大きな町の道路脇に袋詰めの木炭や束にした薪材を山積みにして販売していました。多くはそこを車で通る一般客に対してのもので、出張からバマコへ帰る車の荷台に積まれていきます。これらの薪材が年々細くなっていると以前に機関紙などで報告してきました。

今回目についたのは、これまで売られていなかった小さな村にもこうした炭の袋や薪の山が見られるようになったことです。聞けばバマコの薪炭の値段はここ数年で 1.5 倍くらいに上がっているそうです。バマコは市街地の拡大に伴い人口も増え、薪炭の需要も増え続けて、価格の上昇に繋がっているのです。ファナ地域ではバマコの半分以下の値段で薪炭が手に入るとあっては、出張帰りの車の荷台が薪炭で一杯になるのもうなづけます。

こうして、ファナ地域の人々は薪炭を生産すれば飛ぶように売れることに気づき、里山から薪炭材の伐採がますます増えているのです。

道路脇に積まれる薪材と木炭袋

次世代のために…

これまでの研修は、村で配布した苗木をうまく育てていて、木を植えるのが好きだったり、植林に興味がある村人を見つけて勧誘してきました。そうすると自然と若者が少なくなり、中高年が増えました。

今年の研修では、勧誘した研修者から「これからを担う息子にも研修を受けさせたい」と要望があり、何人かの若者が研修に加わり、これまでの研修者の平均年齢を大きく下回りました。彼らがしっかりと父の背中を見て、里山再生に貢献していってくれることを期待しています。

次の時代を担う若者たち

里山再生の未来像

4 年間に生まれた 27 名の研修生は、経験も年齢もバラバラで、また自身の抱える里山も十人十色でした。それぞれが自分に合った里山再生の活動をしていけばよいですし、それを技術的にも精神的にも私たちサヘルの森が支えていくことが何よりも大切です。

ある者は、研修で学んだ接木技術を活かして、耕作地に生えていたズィズィフィスの在来種に大きな実の成る改良種を接いで、果実を生産し、近くの街の女性に出荷するまでになっています。またある者は、潅木林に有用樹を残しながら、ユーカリやカイセドラを植えて育てています。また、ある者は、この地域で一般的な、樹木を伐採して作る柵を止めて、ジャトロファとアカシア・セネガルの生垣を育成して、家畜の食害に備えています。

こうして、果樹や早生樹を育成することで、薪炭材に代わる現金収入を得たり、柵を作るため木を伐採する代わりに生垣を作って家畜の食害を防いだり、間接的に里山の林を守っていきます。また、有用樹を残し、カイセドラをはじめとする在来種を植えることで、将来に向けた森林資源を育んでいきます。

有用樹とカイセドラを同時育成

緩やかな人のつながりの中で

研修者たちの中には、研修後、バイクを飛ばして研修を行った苗畑主のところを訪れ、技術的なヒントを得たり、解決策を学んだりする者もいます。また、サヘルの森のマリ人スタッフに頼んで、自分たちよりも進んでいる実践者たちのところを訪れて、情報交換など交流を深めている者もいます。

一方で、それぞれの村や地域において、木を育てる先駆者になってもらい、他の村人たちの手本となり、真似していけるような存在になってほしいと期待しています。ある村のある村人が、彼らができるのであれば自分にもできると奮起し、研修者が育てた苗木を自身で購入し、自身の畑に植えました。こうした先駆者から他の村人への波及効果も里山再生実践活動の狙っているところです。

問題解決のためには、村や地域を組織化して、解決策を話し合い、それに向けて皆で一致団結してことに当たらなければという考えがあることは承知しています。しかし、これまでのサヘルの森の経験や他の植林プロジェクトを見るにつけ、それには多くの労力やエネルギーが必要であり、そのようになされた植林は責任の所在が曖昧になり、うまく続かない現状を目の当たりにしてきました。

私たちが目指すのは、先の先駆者がそこかしこに生まれ、それらに触発される者たちがそれに追随して、やがて緩やかな仲間の集まりができることです。ちょうど播いた種が育ち、種を落として増えていくように…。

マリ生活点描

バマコ事務所近くの市場でアチェケを製造するマリ人女性に出会った。

アチェケはもともとコートジボワール料理で、マリでもポピュラーな料理だ。輸入したキャッサバのペーストをふるいでクスクスのように細かい粒にし、鍋で蒸す。油を混ぜた上で、野菜のビネガー和えを添えるのがコートジボワール流。揚げ魚や焼魚の付け合わせにする。発酵して少し酸味があるのが特徴だ。

彼女はコートジボワール人に雇われていて、朝5時から夕方6時までアチェケを作り、夜中12時まで市で売る。休みは日曜だけ。月給15,000CFA（3千円）の大変な仕事だ（榎本）

定例活動の 10 年を振り返る

代表　坂場光雄

サヘルの定例活動は、国内での会員交流、技術研修、人材育成などを目的としています。現場で顔を合わせての意見交換などで交流を進め、身体を動かして様々な技術を体得理解し、現地活動に参加できるような人材を探し求めるなどの活動を行ってきました。

この活動を始めたころは、樹木の根の研修会や森林管理の体験作業などを行なってきました。最近の 10 年は、地域の現場を見て歩くことにより、現在ばかりでなく、過去の歴史・文化の積み重ねなどを学んでいます。

都内やその近隣で、緑の拠点となる公園・緑地、社寺、河川などを結んで歩いています。多くの場合、目的地を定めると、最短の距離と時間で行くことがほとんどで、なかなかその周辺に目を向ける機会が少ないのではないでしょうか。

徒歩で時間を掛けて地域を横断し、地域に点在する社寺や博物館を訪問することで、地域の環境、歴史などを理解することが出来てきたように思います。

東京付近の寺院は、1 千年以上前に創建されたものも点在しますが、多くが江戸時代初めに創建されています。これは江戸幕府の寺請制度が大きく影響しているとあります。地域を歩くと神社と寺院が隣接している場所がたくさんありますが、これは明治時代初めの神仏分離政策により、分けられたようです。

清澄庭園（2013 年 1 月）

これまでに訪れた東京都立庭園である六義園、小石川後楽園、浜離宮、旧芝離宮、向島百花苑、清澄庭園、旧岩崎庭園、旧古河庭園、殿ヶ谷戸庭園などは江戸や明治・大正に作られた庭園を引き継いで、良好な景色を楽しめました。

北区にある荒川知水資料館では、東京東部を貫流する荒川(放水路)が昭和初めに完成して、水害を防止していることを学びました。江戸時代から舟運に使った曳舟川水路跡も歴史を感じながら歩きました。

鬼子母神や善福寺の大イチョウ、九品仏のカヤ、小平の大ケヤキなど巨樹にも出会いました。回遊式の目白庭園(豊島区)、個人邸を公園化した太田黒公園(杉並区)も印象的でした。消防防災施設での体験や展示も有効でした。

鬼子母神の大イチョウ（2015 年 10 月）

市区町村の行政でも、地域を理解するということで、多くの楽しみのある散策コース、歴史コース、自然観察コースなどが作られています。少し残念なのは隣接市町村との連携が少なく、自分の市区町村で完結していることです。

情報化の時代で、現場を訪れなくても、パソコンやスマホなどである程度の状況を把握できるようになりました。特に著名な場所では、ピンポイントで詳細な情報が得られます。ただ地域はそれだけで成り立ってはおりません。立地等の自然環境にさまざまな歴史の重なりがあり、現在の私たちの暮らしがあります。

地域の歴史や環境を自分の足で確かめる現場主義で、参加皆様との交流や技術を学び、「ぶらさかば」を進めていきたいと思います。

会員番号物語（その 13）

ティンナイシャ村とデスマッチミーティングの思い出

高津 佳史（会員番号 333 番）

・サヘルとの出会い

サヘルの森との最初の関わりは、30年以上前のニジェールだった。青年海外協力隊員としてニジェールに居た私は、会創設者の高橋一馬さん（会員番号31番）と首都のニアメーでお会いした。当時、アフリカでの NGO 活動を模索していた高橋さんはサヘル諸国を視察旅行中で、首都にある協力隊事務所に立ち寄られたのだった。その後私は帰国し、熊本の農場で暮らしていたが、思いがけず高橋さんから勧誘の手紙が届いたことで会の活動に参加することになった。

・現地スタッフとして

ごく初期の現地スタッフとして、マリ北部のティンナイシャ村に入り、旧湖底の植林作業に従事した。この頃のスタッフには、小島通雅さん（会員番号5番）、杉野二郎さん（会員番号166番）、坂場光雄さん（会員番号272番）といった今も残る主要メンバーが多いが、一度は活動に関わりながら、その後離れてしまった方々も少なくなかった。

見学者から「禅寺の修行のようだ」と評された旧湖底の家（ブグー）での暮らし。一緒に生活したスタッフだけでも、高田さん、堀さん、志田さん、村上さんなど、今は会から離れた方々の名前が思い出される。

マリでの生活が「修行」レベルに厳しいため、派遣前のスタッフには研修が必要だ！という話になり、房総半島の山中の古民家に出かけて行って自給自足の暮らしを体験するというようなことも行っていた。会も生まれたばかりで若かったが、参加者も元気だった。東京事務所でも「デスマッチミーティング」と称した終わりのない討論会が催され、(今では考えられないことだが）事務所いっぱいに人が集まった。私にとっては、マリの「修行」も東京の「討論」も正直苦手だった。

・大震災とティンナイシャ村

震災ボランティアがきっかけで、思いがけずティンナイシャ村の「援助依存症」について考えるようになった。

地震の3か月後に津波被害を受けた南三陸町に短期ボランティアで入る機会があった。最初はがれきの撤去作業を手伝っただけだが、2年後に再訪した際には仙台まで被災地の現状を見て回ることができた。

東北の被災地を回る中で、マリで最初に暮らしたティンナイシャ村のことを思い出した。未曾有の災害を被った人々がみなかつての村人のように見えたからだ。親戚や仕事がある人は県外に移住し、2年後も仮設住宅に残っていたのは行く当てのない高齢者ばかりだった。線量が高くて戻れないと言われても村での生活を思い続ける人たちは、水があった頃の湖の話を繰り返すマリの村人と同じであった。「水があれば援助なんかいらない」と言った村人もいた。

当時は心の問題など考える余裕もなく、やる気のある村人を助けるという方向に進むことに何の疑問も持たなかった。

1970年代の大干ばつ以来、ファギビンヌ湖の水は一向に回復しなかったため、住民の多くは故郷を離れて行った。リビアやアルジェリアなど国外に出た者も多かった。サヘルが到着した当時、(学校関係者を除けば）村に残っていたのはこうした出稼ぎにも行けなかった人々だった。

当時、現地スタッフはみな、ティンナイシャ村の状況を「援助依存症」と呼んでいた。と言うのも、現地から植林の要請があったというので行ってみると、植林よりも物資や教育支援、雇用を求める村人が押し掛けるというのが村の現実だったからだ。

今になって考えてみると、「話が違うじゃないか、、、」という日本人の複雑な心境が、分かりやすいレッテルを張らせたのかもしれない。村人が体験した大干ばつという未曾有の災害について思いが及ばなかったことが悔やまれる。

会員番号は整理のための数字ではない。
会員番号にはひとつづつのドラマと思いがある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。(サヘルの森)

■グローバルフェスタ 2018 に参加（9/29）

今年は「アフリカの台所」をイメージしてブース作りをしました。ブース内に三石かまどを作ろうという計画がありましたが、初日から台風の影響による降雨、2 日目は中止という予定だったので残念ながら実現しませんでした。

アフリカンスクエアーのご協力でたくさんの食品を扱うことができました。例えば、モリンガティーやドライマンゴー、バオバブの実や葉のパウダー、雑穀などです。コーヒーを扱う団体は多かったのですが、食品を扱っている団体は少なく、興味を持って傘をさしながら立ち寄ってくれる方も多数いました。

食品販売をきっかけにサヘルの里山再生の話ができたり、バオバブ苗木に関心を持ってブース立ち寄った方に里山の食べ物や暮らしを紹介したりできました。林産物がいかにアフリカの里山に住む人びとにとって重要なものなのか伝えるツールとして食品販売は来年も続けたいと思います。悪天候の中、ブースを盛り上げてくださったボランティアのみなさまにも感謝しています。

（原 梓）

グローバルフェスタ会場の様子

■みなこいワールドフェスタ 2018 に出展

10/28（日）に駒ケ根で開催されたみなこいワールドフェスタに出展しました。

毎年、協力隊候補者が自由参加で各ブースを希望してお手伝いしてくれていたのですが、今年は候補者の参加者自体が少なく、サヘルのブースにはお手伝いがゼロでした。いつもの候補者とのやり取りがない分、少し寂しい感じがしました。

とはいえ、一般客の中にも協力隊 OV や国際協力に関心のある人が多いため、その方たちとのやり取りは楽しいものでした。

JOCA（青年海外協力協会）の本部が駒ケ根市に移ったということで、いろいろ変わっていくようです。来年はどうなるのか、期待しているところです。　（榎本 肇）

みなこいワールドフェスタ会場の様子

■ジャパン・バードフェスティバル 2018 に出展

11 月 3 日（土）、4（日）に千葉県我孫子市の手賀沼湖畔で開催された日本で唯一の鳥のイベントに出展しました。

このところ毎年参加しているので、常連さんも増えてきました。「今年の新作はどれ？」と新しく加わった巣のことを聞いてきたり、「もらったホオジロの巣は家宝にしています」とうれしいことを言ってくれたり、年に一度の交流の機会になっています。

やはり常連さんの鳥好き一家がお礼に来てくれました。夏休みの自由研究で鳥の羽根について発表したところ、県の代表に選ばれたとのことでした。野鳥に詳しい兄弟でしたが、上田さんがウグイスの巣などを送ってあげたのが励みになったようです。

鳥に関するイベントなので、アフリカや砂漠化とは直接の関りは無いのですが、広い意味での「サヘル関係者」とでもいうような方々との出会いもあります。サヘル創設当時のメンバーと知り合いだった女性、メンバーと千葉の山奥で活動していた面々、外務省や JICA の OB でアフリカ関連の仕事に携わっていた方など、田舎町のイベントにしては面白い人たちに出会えました。

（千葉支部　高津佳史）

国内活動（7～12 月）

＜報告会＞
・ 9/23　坂場光雄　現地活動報告会
「暮らしと動物」（町田市民フォーラム）

＜サヘルキャンプ＞
・ 8/18　町田市里山交流館

＜定例活動＞
・ 7/21　里山の緑地と社寺を巡る
・ 9/15　江戸の水路跡を辿る
・10/20　競馬博物館と競艇場を見る
・11/17　江戸の史跡と水の共生

定例活動（1～2月）

来年 1 月、2 月の定例活動の予定です。坂場代表とぶらぶら散歩をご希望の方は、事前に事務局までご連絡下さい。

●1 月 19 日（土）10:30 集合
多摩川七福神と多摩川緑地
多摩川に近い場所の七福神と河川沿いの緑地を歩きます。
JR 南武線・平間駅改札
●2 月 16 日（土）10:30 集合
多摩丘陵の里山をたどる
多摩丘陵を縦断して、里山の状況を観察します。
小田急線・百合ヶ丘駅改札

会 員 総 会（ 3 月 ）

2018 年度の会員総会を 3 月 24 日に予定しています。今回も、現地活動報告・会員総会・懇親会の三部構成です。
1 年の活動を振り返り、新たな 1 年の活動を考える貴重な機会です。是非ご参加ください。

日時：2019 年 3 月 24 日（日）
13:30 開場　14:00 開始
場所：JICA 地球ひろば（市ヶ谷）
セミナールーム 201AB
詳細は会員の皆様に追ってお知らせします

クリスマス募金のお願い

早いもので今年も残すところわずかとなりました。年末恒例のクリスマス募金への御協力をお願いします。同封の振り込み用紙をご利用下さい。

苗 木 募 金 で 里 山 再 生

2004 年から始まった里山再生プロジェクトでは、苗木募金への御協力もお願いしています。
苗木募金は一口 2 千円から受け付けています。マリで 1 本の木を植えて育てていくためには、スタッフの派遣費用も含めておよそ 2 千円の資金が必要となるためです。（なお、募金の際は「苗木募金」と明記下さい）

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

・一般会員　年 5,000 円
・維持会員　年 20,000 円

特定非営利活動法人　サヘルの森
住所：〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403
TEL：042-721-1601（留守電対応）
FAX：042-721-1704
郵便振替口座：00170-6-115054

HP：http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/
BLOG：http://sahelnomor.exblog.jp/
E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
機関誌『サヘル』No.103　2018 年 12 月 20 日発行
発行人：坂場光雄　／編集：榎本肇
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊